

螢の光りにて一筆

服部貞子

またしても田舎の自慢聞え上げ候。

夏も眞盛りの昨日けふ、朝に星を戴いて靜かに運ぶ杉の庭下駄、又なう輕うて心地よう候。よべ數へおきし朝顔の、見事はづれて、垣根の外に僅に二つ三つ、憎けれども嬉しう候。黒く光れる此の顔洗ふべく、溢るゝ井水に近寄り候へば、可愛の小雀三羽、しきりに何をかついばみ居り候。見れば、きのふ過ちこぼしたる米幾粒、sてもよき功德になり候もの哉。うがひしつゝ、吾が草屋根を見やり候へば、此の間の雨にてや、いたく草のびて候。さればか、低き家も何となう高き心地致され候よ。

父が丹誠の里芋は、きのふ初物致し候。コロ／＼とまろび落つる卷葉の白玉、惜しき心地致され候て、いたくも凹みたる硯にうけて、先づ今日の日記のはじめに、二日、晴れと書き入れ申して候。新しの手拭を姉様冠り、今日は胡瓜もぎ致し候。こは私の丹誠に候へば

味は二重もの、一籠おくり参らせ候。風呂たいて、畑の父君母君を待ちつゝ、小屋なる牛の鼻なでながら、そぞろ眺むる紅の雲、あしも亦上天氣にて候。眞盛りなる卯花垣のあたりかしましと見れば、蟬取博士の弟の歸りにて候。鳥も埒に、父母おかへり、嬉しきは母の右手なる赤きくほづきの一本にて候。にごり池にて洗ふ父君の鍬、夕日に映えて、蛙も歌ひ出で候。やがて樂しき夕げのむしろそはいつも、弟の蟬の話にて、にぎやかに候。風鈴の音に耳うちすまして、揉みまゐらする父君の御肩、いびきは早も高う候。かくて吾等は落しき一日はつくるにて候。これ自慢の價あるものと存じ候まゝ、螢の光りにて一筆ものし候かしこ。

以下の修正を施しました（数字は底本の頁行）。

188-7 柿様冠り、↓姉様冠り

初出…不明

底本…小宮水心編「才子才媛 尺牘文大観」

岡本偉業館

明治四十一年七月五日発行

入力…小林 徹

公開…令和六年一月二十七日

[リンク…「作品年譜」](#)

[水野仙子ホームページ](#)